

## スパファリのシベリア地図

三上, 正利

<https://doi.org/10.15017/2244071>

---

出版情報 : 史淵. 99, pp.39-76, 1968-01-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# スパファリのシベリア地図

三 上 正 利

緒 言

- 一、スパファリの使節旅行
  - 二、スパファリ図の製作年代
  - 三、スパファリ図の中国とシベリア
  - 四、迂回できない山脈の岬
- 結 言

緒 言

一七世紀にロシアで作製された各種のシベリア地図について、筆者はこれまで数回にわたり、一七世紀初期のものから年代順に考察を加えてきた。<sup>①</sup> 本稿はそれらの後につづくもので、今回論考の対象とする地図は、ロシアの使節としてシベリア經由で清国へ派遣された有名なスパファリの使節旅行（一六七五—一六七八年）に関係のあるシベリア地図である。

スパファリが清国への使節旅行から一六七八年にモスクワに帰着して、モスクワのロシア外務省 (Posolsky prikaz) へ提出したと思われるシベリア地図は、かなり早期にロシア外務省から失われたものと考えられていた。しかるに、近年その原図かあるいは複写図かとみられる一葉のシベリア地図が、古地図の研究者・蒐集家として国際的に有名であったバグロフ (L. Bagrov, 1881—1957) の所有に帰したのである。そしてバグロフは、この地図の写真版を古地図研究誌「イマゴ・ムンディ (Imago Mundi, IV, 1947)」に掲載された自己の論文に付して公表した。<sup>②</sup> 本稿で論ずるのはこの地図で

ある。

一、スパファリの使節旅行

ニコライ・ガヴリロヴィチ・スパファリ (N. G. Spafary [Spathary], 1625 [? 1635]<sup>(3)</sup>—1708) は、黒海北西岸のモルダヴィアにおいてギリシア人の家系に生れ、長じて後、コンスタンチノープルおよびイタリアなどで勉強した人である。才能豊かであったかれは、古代および現代のギリシア語、トルコ語、アラビア語、ラテン語およびイタリア語に通じており、哲学、歴史学、文学、神学、自然諸科学、数学などを学んで、当時におけるもっとも教養ある人物とみなされていた。当時ロシア政府は、ドナウ川沿岸諸国と連合して、共通の敵国であったトルコにあたらうという新外交政策にのりだしたときで、ロシアの当面する外交問題を処理するために「東方問題」に明るい新人をもとめていた。そのようなロシア政府の要求に応ずる適当な人物と認められたのがスパファリである。かれは、ロシア語にもすぐ習熟するだろうということでロシア政府へ推薦されて、一六七一年六月にロシアに到来し、同年一二月にはロシア外務省のギリシア語やラテン語およびその他の諸国語の通訳官に任命された<sup>(4)</sup>。

さて、その後数年たって一六七五年の初めに、ロシア政府は清国へ使節を派遣することを決定した。使節の目的は、当時アムール川上流の露清国境方面で発生していた両国間の紛争を解決し、清国との通商関係を開始し、またそれと同時に、露清間の交通路のうち最短距離でもっとも便利安全な交通路について、正確な情報入手することなどであった。ちょうどこのとき、前述のようにロシア外務省の通訳官として在任していたスパファリは、この遣清使節団の主席 (Doozol 大使) に任命されたのである<sup>(5)</sup>。

使節スパファリの主要な任務は上述のような諸問題を解決することであったが、なおそのほか、使節旅行の途中で通過する沿道のシベリア、モンゴルおよび清国の地理、民族、政治状態などあらゆる事情を調査したうえで、一切の事実を正

確に記述すべきこと、などを命じられていた。そのうえ本稿と直接関係があるので特に注意を要することは、シベリアの地図を作製することも、かれの任務のうちにあつたのである。すなわち、ロシア外務省からスパファリにたいして一六七五年二月二五日にあたえられた命令のなかには、「トボリスクから中国の国境町にいたるまでの沿道の土地、諸都市および道路を、すべて地図に描くこと」も指令されており、またそれと関連することと思われるが、スパファリはモスクワで「種々の天体観測器具と羅針盤」を受取つたのであつた。<sup>(7)</sup>

スパファリ等の遣清使節団は一六七五年三月三日にモスクワを出発して、この時代にモスクワからシベリアへ行く普通の交通路であつた北東にむかう道をとつて、<sup>(8)</sup>ロストフ (Rostov)、ヤロスラヴリ (Yaroslavl)、ヴォログダ (Vologda)、ヴェリキー・ウスチユウク (Veliky Ustyug)、ソリ・ウイチエユドスカヤ (Sol-Vychnegodskaya)、カイユロドク (Kaigorodok)、ソリ・カムスカヤ (Sol-Kamskaya) を經由し、ここからウラル山脈を越えてヴェルホトゥリエ (Verkhoturysk)、トゥリンスク (Turinsk)、チュメニ (Tyumen) を通つて、一六七五年三月三〇日に西シベリアのトボリスク (Tobolsk) に到着した。

使節団はトボリスクに約一カ月滞在した後、五月三日にここを出発し、イルチシ川を下航しオビ川を上流にのぼり、連水陸路を越えて、七月九日にイエニセイスク (Yeniseisk) に着いた。ここを八月一八日に出発し、船でアンガラ川を上流へさかのぼり、ブラーツク柵 (Bratsk) をとおり八月三〇日にバラガン柵 (Balagan) を通過して、九月五日にイルクーツク (Irkutsk) に到着。

九月七日にイルクーツクを出発した一行は、船でバイカル湖を渡るのに苦労した後、九月二二日にセレンガ川の川口にはいり、この川を上流へさかのぼつて一〇月二日にセレンギンスク柵 (Selenginsk) にたちよつた後、ウダ川の岸を上流へむかつて陸路を行進して、一二月四日にネルチンスク (Nerchinsk) に到着した。ここを一二月一九日に出発して東進し、アルグニ川を渡りハイラル (Khatlar) の北方を通過して、翌一六七六年一月末ごろ現在のチチハル (Tsitshar,

スパファリの旅行記では Naun と記載) に着き、ここに約二カ月半ほど滞在した。使節団は四月一七日にこの地を出発し、満州を南へ通過して、一六七六年(康熙一五年)五月一五日到北京に到着した。モスクワ出發らしい実に一年と二カ月半の旅行である。

スパファリ等の使節団は、同年九月一日まで北京にとどまって清国との外交交渉に努力したが、なんらの成果をあげることができず、往路とほぼ同じチチハルからシベリアを経由する道をとって帰路についた。その途中シベリアとモンゴルとの国境の要地セレンギンスクでは、一月初めから翌一六七七年五月三日まで約六カ月間滞在したりして、一六七八年一月五日にモスクワに帰着したのであった。<sup>(1)</sup>

## 二、スパファリ図の製作年代

使節スパファリは北京からモスクワへ帰着すると、自らの旅行記およびその他の地理的著述をロシア外務省へ提出した。それらのうちで本稿に関連のある特に注目すべきものの一つは旅行記で、その標題は「トボリスク市からキタイ国境までのシベリア王国の旅行記 (Kniga, a v ney pisanu puteshestvie tsarstva Sibirskovo ot goroda Tobolskovo i do samovo rubezha Kitaiskovo)」となっている。スパファリのこの「シベリア旅行記」は、その後ただ一つの手写本のままで約二〇〇年間ロシア外務省の古文書室に埋れていたが、ようやく一八八二年にロシア地理学会によって、「ロシア地理学会報告、民族誌部、第一〇巻一号 (Zapiski RGO po Otdeleniyu etnografii, 1882)」に印刷して公表された。その公刊文には、当時スパファリの諸著作に通暁していた学者アルセニェフ (Yu. V. Arsenyev) が、序文をかき注釈をつけていた。<sup>(2)</sup>

アンドレーフ (A. I. Andreyev) によると、スパファリのこの「シベリア旅行記」には、シベリアを通過して往復旅行をした使節団一行の交通路が詳細に記述されており、旅行途上でスパファリが実見した山、川、湖、小流、および集落

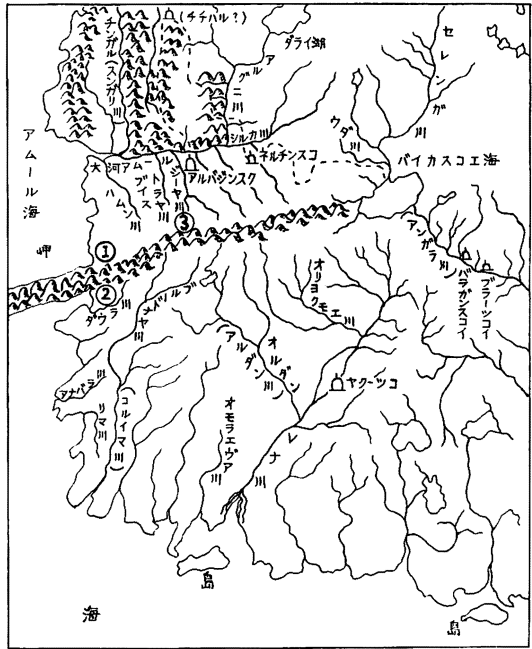


Map of Siberia by Spafarri, 1678  
(Division L. Degree, 25.3 x 31.3 cm)

第1図 スパファリのシベリア地図(1678年?)

の名称をあげてその間の距離も示してあって、シベリアの地理的記述としてこれほど詳細なものは、ロシアで初めて現われたのであった。遺憾ながらわれわれにとっては、この古い文献を直接参照することは容易でないが、幸にバッドレー(J. F. Baddeley)がかなり長文にわたりその抜萃を英訳している<sup>1)</sup>ので、その片貌を知ることが出来る。しかしバッドレーはこの英訳では、非常に多くの地理および地形の記述を省略したという。

さて、スパファリはこの「シベリア旅行記」とともに、多分、使節の旅行路を示したシベリアの地図をも、ロシア外務省へ提出したものと考えられる。しかし、この地図はかなり早期にロシア外務省から失われたものらしく、自らロシア各地の古地図類を捜索したバグロフの記載によると、「ロシアの図書館にはこの地図の原図もなければ複写図もない。しかし、この地図の手描のものが一枚(原図か複写図か?—バグロフ注)、偶然私の所有に帰した<sup>2)</sup>」のである。バグロフは、かれが入手したその地図を、多年にわたってかれが刊行を



第2図 スパファリ図のアジア北東部

図中の記載 { ①—② 連水陸路は一日で越えられる  
③ バイカルから海にいたり、さらに海中  
にまで達する山脈

が、点線で地図上に記入されている。この点線を丹念にたどってみると、それはさきに第一節で記述しておいた使節スパファリの旅行路に合致している。図の右下のカマ川とウスチュウクとの間で、旅行路をしめす点線が南北にわかれて二重になっているのは、おそらく往路と帰路とがこの部分では相違したのであろう。

しかし、図の左方の北部満州において、チチハルと推定される都市からアムール川北岸のロシアのアルバジン柵 (Albazine, 一六六五年建設、中国側文献の雅克薩城) まで描かれている点線は、スパファリの旅行路ではない(第二図参照)。これはその往復路ともにアルバジンにはたちよらなかつたからである。地図上の点線がスパファリの旅行路をしめすものとするれば、この区間については疑問が生じてくるが、これは、当時アルバジンは露清間の重要な係争地となりはじめており、

つづけてきた国際的な古地図研究誌「イマゴ・ムンディ (Imago Mundi, IV, 1947) のなかに、写真版にして公表した(本稿第一図)。この地図の実物の大きさは、五二・五×四〇・五センチメートルであるという。

第一図をみると、方位盤はないが南を上にして描かれてあり、アジア大陸の大部分とヨーロッパ・ロシアとをふくむ広範囲な内容の地図である。図の右下隅にはロシアの首都モスクワがあり、図の左上には清国の首都北京 (Pekin) が描かれていて、モスクワからシベリアを横断して北京にいたるまでの交通路

スパファリの使節行の使命とも深い関係があったので、アルバジンとチチハルとの間を連絡する交通路を特に描き入れたとでも解釈しておくべきであろう。

この地図には、標題はないようである。図の右下隅にある長方形の枠のなかには、ロシア語で六行にわたる文章が書込んであって、一見したところではこの地図の標題かと疑われる。しかし、そこに書込まれている文章をよんでみると、「モスクワから陸路トボリスクにいたり、トボリスクから水路でセミバラチンスク柵にいたり、セミバラチンスクから陸路でシナの国境にいたり、そして北京市にいたるところの細い交通路 (Doroga, kotoraya tropami idyot ot Moskvy sukhim putem do Tobolska i ot Tobolska vodnym putem do Semipalatskovo ostroga i ot Semipalatskovo ostroga sukhim putem do Kitaiskovo rubezha, i do goroda Pezina)」と書かれてゐる。<sup>(12)</sup>

このトボリスクから船でイルチシ川をさかのぼり、セミバラチンスクを経由して、陸路モンゴルから北京にいたる交通路は、スパファリより二一年前に清国へ派遣されたロシア皇帝の使節バイコフ (F. I. Baikov) が、一六五四年に通過した交通路であつて、<sup>(13)</sup>スパファリのおつた道ではないし、地図上にもこの交通路をしめす点線は描かれていない。要するにこの長方形の枠のなかには、スパファリの旅行路を点線で描いているこの地図とは直接関係のない、以前にバイコフが利用した道を参考のために簡単に記載しているだけのことである。ここにはこの地図にたいする図名も地図作者名も製作された年紀も、記載されてはいないのである。

それゆゑ、以下この地図の作者および製作年代その他について、しばらく考察してみることになしよう。まず、この地図の作者に関しては、ソ連のベロフ (M. I. Belov) は次のように考えている。この地図がスパファリの清国旅行に直接関係をもつものであることに疑問はないが、しかしその作者がスパファリであるか否かは不明である。なぜならば、地図の凡例のなかには、このことについて何等の記載がないからである。<sup>(14)</sup>と。またアンドレーフ (A. I. Andreyev) は、この地図を誰が作ったかを確証することは今はできなかつたが、この地図はその内容において、前記のスパファリの報告書「ト



ポリスクの町からキタイ国境にいたるシベリア旅行」に、はなはだ近い<sup>(9)</sup>、とのべている。

以上記述したところによると、この地図の実際の作者がスパファリ自身であるか否かは、厳密にいうと断定できないが、スパファリの使節旅行に非常に密接な関係をもつ地図であることは間違いないのである。そして右のアンドレーフが言うように、また本稿でも後で論述するように、この地図の描図とスパファリの諸著作にみえる記述内容とが対応していることなどを考慮にいてみると、この地図をバグロフにしたがって「スパファリのシベリア地図」とよんでおいても、取扱いはほとんど支障はおこらないように思われる。

また、この地図の製作年代については、前述のように地図自体には年紀がない。バグロフは「イマゴ・ムンディ、第四巻、一九四七年」に初めてこの地図の写真版を公表したときに、その図版の下につけた説明文には一六八二年とかき、本文の六九頁では、一六七五年スパファリが中国への使節旅行中にシベリアの地図を作ったとかき、同じ論文のなかで前後矛盾する二つの年代を記載した。これにたいしてペロフは、バグロフのこれら二つの年紀を誤りとし、地図上に使節の旅行路が記入されているから、この地図はスパファリが使節旅行からモスクワに帰着した後に、すなわち、かれがロシア外務省へ旅行記と地図とを提出した一六七八年に、製作されたものであると主張した<sup>(10)</sup>。アンドレーフも、バグロフの一六八二年という記載は誤りであるとし、上記のペロフの見解に賛成している。

これについて私見をのべてみると、後で第三節において考察するように、スパファリ図のシベリアの描図には旅行で見聞された新しい資料が盛りこまれていて、従来のシベリア地図より格段に詳細正確となっている。またスパファリ図のなかの中国の描写には有名なマルチニ(M. Martini)の「中国新地図帳、一六五五年」のなかにある中国全図が使われているが、そのマルチニの地図帳をスパファリは北京で入手したらしく推測されるのである。このような諸事情を考慮すると、スパファリ図の基礎的な地形が描かれるのは早くとも、使節団がシベリア旅行を終えて北京に到着した一六七六年の後半から後のこととなる。そのうえ、地図上には使節の旅行路が往復ともに描きいれてあるので、使節団がまだ北京へ

向う往路にあった一六七五年という年紀を採用することは、いづれにしても無理である。<sup>(19)</sup>

次に、バグロフの提案している一六八二年というもう一方の年紀である。バグロフ自身はこの年紀の根拠を何も示していないので、われわれはただ推測するほかはない。筆者は、この年紀はスパファリの著作とされる「ロシアの村を中国人から分界する大河アムールの物語 (Skazanie o velikoy reke Amure, kotoraya razgranila russkoye selenie s Kitaysy)」の年紀と一致させたものではないか、と推測する。この「物語」の著者がスパファリであることは、すでに古くアルゼニエフ (Yu. V. Arsenyev, 一八八二年) およびミハイロフスキー (I. N. Mikhailovsky, 一八九九年) によって主張され、今日では一般に認められているところである。「大河アムールの物語」の刊本としては、チトフ (A. A. Titov) 編「十七世紀のシベリア、一八九〇年」のなかに、スパスキー (G. I. Spaskiy) 所蔵の一七世紀の写本を基礎としたものが公刊されており、またバッドレーは、レニングラード公共図書館所蔵の別の写本 (GPB, F-IV, No. 141) から英訳したものを、その著書のなかに掲載している。<sup>(20)</sup> したがって「物語」の内容はそれらの刊本によってよく知られているけれども、しかしその著作年代は学界でも不明確であるらしく、アンドレーフは著作年代については何も言及していないし、ベルク (L. S. Berg) はこれを一六八九年 (ネルチンスク条約締結) 以前の著作であるとだけ言っており、またグレコフ (V. I. Grekov) の著書では一六七五年としているから、<sup>(21)</sup> そういう見解もあるとみえる。<sup>(22)</sup>

バグロフは、上述のようにかれの一九四七年の論文においては矛盾する二つの年紀を提示したが、その後一九五五年に発表した論文のなかでは、「大河アムールの物語」の年代を一六八二年とし、スパファリ図の年代も一六八二年としている。<sup>(23)</sup> その論文のなかでバグロフは、スパファリ図に描かれているバイカル湖付近から北東方へのびて海中にまで突出している特色ある山脈の表現 (第二図参照)、およびそのかたわらに記入されている説明の文句が、「物語」のなかの記載 (未稿第四節、資料V) に合致することを指摘しているので、このように地図と「物語」とが一致している事実が、スパファリ図の年代を一六八二年とするバグロフの根拠ではないかと推測される。かれがスパファリ図の年代として真に主張したいの

は、この年代であろう。

この異様な山脈の表現は、従来の一七世紀シベリア地図には見られず、スパファリ図にいたって初めてあらわれた顕著な特色であり、本稿でも後で第四節において詳細に論及する予定である。この特色ある山脈の表現が「物語」の記事に照応することは注目すべきで、スパファリ図の年紀をこの「物語」の年代に合致させたと推測されるバグロフの見解は一応考慮に値しよう。しかし今の筆者には、「物語」の著作年代をどの程度まで確実に一六八二年と決定できるのか明らかでない。バグロフは前記のアルセニエフの論文(一八八二年)を参照しているので、そこから示唆をうけたかとも推測されるが、年代の決定方法については何も言及していないのである。したがってその確実な根拠が明らかになるまで、バグロフの一六八二年という年紀は今の筆者としては保留しておくほかはない。

このようなわけで、本稿ではスパファリ図の年紀としては一応ペロフやアンドレーフの主張にしたがうこととし、スパファリが使節旅行からモスクワに帰着して、シベリア省へ「シベリア旅行記」として多分シベリア地図をも提出したと考えられる一六七八年を、採用しておくことにする。

最後にこの地図の所在である。スパファリによってロシア外務省へ提出されたこのシベリア図は、いつの時代にかロシア外務省から失われてドイツへ渡ったものらしい。第一図の右下をみると、そこに円形、長方形および楕円形の三個の蔵書印が押されている。そのうち円形の押印の文字は、「王立地図学研究所、ヘルリン (KOENIGL. KARTOGRAPH. INSTITUT BERLIN)」と読めるし、他の二個もアンドレーフによるとベルリン図書館の押印である<sup>26)</sup>。

それらの図書館ならびに研究所を転々としたこのシベリア地図が、ついにバグロフの所蔵に帰するにいたった事情も、またバグロフが一九五七年に死去した後はどこに所蔵されているのかも、いま筆者には明らかでない。しかし、バグロフ蒐集の他の古地図類が、たとえば、一七世紀末から一八世紀初めにわたるころの代表的なシベリア地図帳の一つである、*シムプン* (S. U. Remezov) の「*ホログラフニイ地図帳 (Khorograficheskaya kniga)*」の原本が、アメリカ合衆国の

ハーヴァード大学 (Harvard Univ.) 図書館の所蔵に帰したことを思えば、あるいはこのスパファリ図もアメリカへ渡っているかとも推測される。

### 三、スパファリ図の中国とシベリア

つぎには、スパファリ図がシベリア地図としてもっている内容の検討であるが、それに移るまえに、この地図のなかのシベリア以外の中国その他の地図について一言しておきたい。

まず、スパファリ図の中国の部分は、何を資料として描かれているかという問題である。ハッドレーによると、スパファリの中国に関する著作「中国誌 (Opisanie perryya chasti vseleennyya, imenuemoy Azii...)」は、そのほとんど大部分が有名なマルチニ (Martinus Martini, 1614—1662) の「中国新地図帳 (Novus Atlas Sinesis. Amsterdam, 1655)」の逐語訳に近いものであると<sup>(28)</sup>いう。またマンドレーンにちなんで、スパフヤリの「タタール誌 (Tatarskaya knizhitsu)」は、やはりマルチニの「韃靼戦記 (De Bello Tartarico. Antwerp, 1654) のロシア語訳でもなし、スパフヤリは「韃靼戦記」のなかの中国図「Situs provinciarum Imperii Sinici 1654」を<sup>(29)</sup>シベリア省へ提出したということである。なおハッドレーは、上記二つのマルチニの著作を、スパファリは北京にいた耶穌会士 (Jesuits) から入手したものであろう、と推測している。そしてスパファリはその旅行中に、既述のようにセレンギンスクその他で長期の滞在をしているので、使節旅行の間でも、中国で入手した種々の資料を翻訳したり、中国やシベリアに関する自己の著述を進めたりする時間的余裕もあったことと思われる。たとえば、スパファリによる前記マルチニの「中国新地図帳」の翻訳と「中国誌」の著述とは、明らかにかれの旅行中におこなわれている。<sup>(30)</sup>

そこで、この時代にヨーロッパ人が作った種々の中国図と、スパファリ図の中国の部分とを比較してみると、予測したとおりスパファリ図の中国の部分は、やはりマルチニの「中国新地図帳」のなかにある中国全図「Imperii Sinarum nova

descriptio”と描図がほとんど同じであつて、このマルチニの中国全図を利用して描いたものであることが断定できるのである。

そのほかスパファリ図では満州の地形もかなり詳細に描かれてあり、朝鮮半島も描かれてあつて、この半島には朝鮮国 (Koretskoye gosudarstvo) と記載されている。またスパファリは北京への使節旅行のときにアムール川は航行しなかつたのであるが、スパファリ図では、アムール川流域の描図も幾分改良されたような印象をうける。地図をみるとこの川の名は単にアムールとせず特に大河アムール (Velikaya reka Amur) としるやれ、これに流入する左岸の諸支流には、川口に近いものから上流へとその河名ハムン川 (Khamun, これはアムグニ川 [Amgun] に比定される)、グイストラヤ川 (Bystraya, これはブレヤ川 [Bureya] に比定される)、およびズィーヤ川 (Ziya, これはゼーヤ川 [Zeya] に比定される) がしるされ、そこからすこし上流のアムール川畔には既述のアルバジン柵 (Albazinsk) が描かれている。また右岸の明らかにスンガリ川 (Sungari, 松花江) と思われる大きい支流には、チンガル (Tin Gal) と付記されている (第二図参照)。

バグロフは、スパファリの著作「大河アムールの物語」の記述やスパファリ図のアムール川の描図資料としては、多分ポヤルコフ (V. Poyarkov) とハハロン (Ye. Khabarov) とのアムール川探検報告が利用されたであろうと推測している。またポレヴォイ (B. P. Polevoy) は、スパファリのアムール川およびサハリン島 (樺太) に関する知識は、一六五二年ごろにアムール川の下流域で活動していたことのあるポリヤコフ (S. V. Polyakov) から得たであろうと推測している。以上のようなバグロフおよびポレヴォイの推測は、それを基礎づける文献的資料が挙示されていないので、これらの推測をいまここで確実なものと断定はできないが、そのような諸資料がスパファリ図のアムール川流域の描写に利用されている可能性は、大いにあることを認めておかなければならない。

さて、以下スパファリ図のシベリアの部分の考察に移ることにしよう。この地図のシベリアの描図は、これ以前の一二

世紀ロシア製シベリア諸地図、すなわち一六六七年の「ゴドゥノフ図」や、一六七三年シベリア地図およびそれを複写したものとみられているバルムクヴィストのシベリア全図（一六七三—七四年）（第四図参照）などに比較して、スパファリ使節団が通過したシベリア沿道の描図が、格段に詳細となり正確にもなっていることが一見して明瞭に認められる。特にシベリアにおけるバイカル湖の位置と、バイカル湖から流出してイェニセイ川に合流するアングラ川流域との描図は、大いに改良されている。以前の諸地図ではバイカル湖の位置は、イェニセイ川を下流から真直ぐ上流へたどって行くとそのままバイカル湖に突きあたるとような位置にあって、アングラ川の存在は無視されていた。ところが、スパファリ図ではバイカル湖 (Baikaskoye more と記載) の位置が正しく東方へ移されており、そこから流出する長いアングラ川がイェニセイ川に合流するように描かれていて、アングラ川の沿岸には、バラガンスコイ (Balaganskoy, 今日 *Balagansk*) およびブラーツコイ (Bratskoy, 今日 *Bratsk*) が記載されている（第一図と第二図参照）。

またシベリア北方の北極海沿岸と東方の太平洋沿岸とは、以前のシベリア諸地図では、出入の少ない平滑な海岸線が描かれていたが、スパファリ図では地図らしい感じのするかなり出入の多い複雑な海岸線となっている。このことは、シベリア北部や北東部に関して何か新しい地図資料が利用されたことを推測せしめる。特にレナ川口以東の海岸線は、改良が著しい。以前の二六七三年シベリア地図やバルムクヴィスト図などにおいては、シベリアの北極海岸はレナ川口のすこし東方で南へ直角にまがってしまい、この直角にまがった海岸はゆるやかな波状の曲線を描いてそのままアムール川口に達していた。そして、実際には北極海へ流入しているアラゼヤ川 (Alazeya) とその東方のコリマ川 (Kolyma) とは、その地図上では、この一見したところ太平洋側とみえる直角にまがった方の海岸へ流入するように描かれていた。しかるにスパファリ図では、コリマ川口の東方までが北極海岸のつづきとして描かれている。

すなわちスパファリ図を入念にしらべてみると、レナ川口の東方にはオモロイ川 (Onoloy, 地図上には Onoloyeva と記載) があり、その東方には長く海上へ突出した多分現在のスヴィヤトイ・ノス岬 (Syatoy Nos) と推定される岬

があり、その先端ちかくには、バリシヨイ・リヤホフスキー島 (Volshoy Lyakhovsky) とおもわれる一大島が描かれている (第二図と第三図参照)。北極海岸はなお東方へつづいて長大なコルイマ川の川口に達し、その東方に隣接する岬の突端で直角に南へまがるのである。この北極海側へ流出するようにみえる最後の長大な川には、河名の記載はないが、これがコルイマ川であることは、その上流の支流にブルードナヤ川 (R. Budnaya) と記入してあることから確定できる。後で次節において引用するように、一六七三年シベリア地図の説明書 (Spisok...) には、「ブルードナヤ川はコルイマ川へ流入し、コルイマ川はレナ海 (北極海—三上注) へ流入する」という一句があるからである (次節の資料Ⅲ参照)。スパファリの著作とされる「大河アムールの物語」あるいは「大河アムールの記述」にも、同様の記載がある (次節の資料Ⅴ参照)。このように、レナ川以東の北極海沿岸がコルイマ川の東方まで張りだしているようにみえる描図の仕方は、筆者がこれまで考察してきた従来の一七世紀ロシア製シベリア諸地図にはみられなかったもので、実にこのスパファリ図にいたって初めて現われた新しい表現である。

コルイマ川の東方で直角にまがった海岸は、やがてリマ (Lima) と書かれた川を流入させた後、大きい半島となって突出する。その先端へ流出する川には、アナバラ川 (R. Anabara) と記入されている。その南方にもう一つ半島があり、その半島の南側へ流出する川にはダウラ (Daura) としるされている。その南方には、バイカル湖の東方にはじまる長大な山脈が遠く海岸に達し、さらに海上へながく突出して、地図の図郭外にまでのびている。そしてこの長大な山脈の海岸ちかくには、ダウラ川のすぐ上のとこに山脈の両側にわたって、「連水陸路は一日で越えられる (Voloj khodim den)」と付記されており、また同じこの山脈の中央部のところには、「バイカルから海にいたり、さらに海中にまで達する山脈 (Gory ot Baikala i do morya i v more)」という説明の文句が書かれている。以前の 一六七三年シベリア地図ではコルイマ川までしか描かれていなかったから、上記のようなコルイマ川から長大な山脈の岬にいたるまでの北東アジア沿岸の描図もまた、スパファリ図にいたって初めて現われた新しい表現である。

またスパファリ図には、ロシア人によって発見されたアナドゥイリ川が、ロシアのシベリア地図としては早期に描かれたと解釈できるように思われる。ソ連のペロフは、一六四八年のデジニョフ (S. Dezhnyov, あるいは Dezhnev) のアジア北東端の回航を証明しようとして、貴重な研究書「セミヨン・デジニョフ (Semyon Dezhnyov, 1955)」を発表したが、そのなかでペロフはスパファリ図に記載されている前記のアナバラ川をアナドゥイリ川と解釈して、ここにアナドゥイリ川が初めて描かれ記載されたとし、次のように主張している。すなわち「スパファリのシベリア地図では、レナ川のかなたには巨大な陸地の突出部が描かれ、その突出部は北東にむかい、ついで南方へアムール川のほうへ急に方向を交える。この突出部はあたかもチュート (Chukotsky) 半島のように描かれた。スパファリ図には、デジニョフによって発見されたアナドゥイリ川が初めて描示された」と。

ポレヴォイも右のペロフと同様に、スパファリ図のアナバラ川をアナドゥイリ川と解釈している。すなわち今日のシベリア地図をみるとレナ川の西方にアナバル川 (Anabar) があるが、スパファリ図のアナバラ川はコルイマ川よりも東方に描かれているので、それは今日のアナバル川ではないとし、スパファリ図のアナバラ川は一六七三年シベリア地図の説明文 (次節の資料Ⅲ参照) などに出てくるナナボラ川 (Nanabora) と同じものであり、このナナボラ川というのはアナドゥイリ川の別名であったと解釈している。以上のようにアナバラ川をアナドゥイリ川とみるポレヴォイ並びにペロフの解釈は大体妥当と思われるので、ペロフの見解にしたがって、スパファリ図にはアナドゥイリ川がシベリアの地図として最初に描かれたとみることもできそうである。

しかしポレヴォイによると、いわゆる「一六七二年シベリア地図」(これは最近では一六七三年シベリア地図とよばれるようになったが、かれはこの地図を一六七四年の作製と考えており、そのことを近く論文に書く予定という) のなかのアルドゥイ (Ardy) という川の名があつて、これはスタドゥヒンの請願書などでアナドゥイリ川を指すのに使われているアドゥイリ (Adyr) の歪曲された形であるという。このようなポレヴォイの主張にしたがうならば、この地図の方が



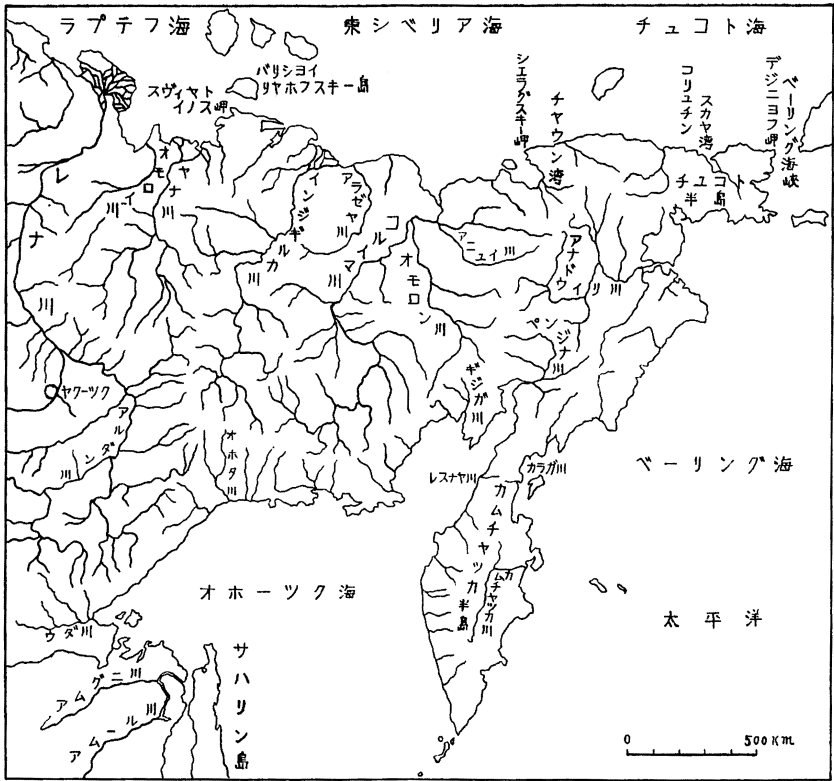
スパファリ図より早いアナドゥイリ川の描図ということにならう。

しかしまた後述するようにポレヴォイは、これまで一般に右の一六七三年シベリア地図の複写であるとみなされていたスウェーデンのバルムクヴィストの複写図と、スパルヴェンフェルトの複写図とを、いわゆる「ゴドゥノフ図、一六六七年」と同年に作られた別のシベリア地図を複写したものとみる新しい意見をだしており、これら二つのスウェーデンの複写図にみえるアジール川(Adir)をアナドゥイリ川であると考えている。もしそのようなポレヴォイの見解が是認されるなら、これらスウェーデンの複写図の原図となった一六六七年のシベリア地図というものが、おそらく最初にアナドゥイリ川を描き入れたロシア製の地図ということになる。このように考察してみると、スパファリ図にアナバラ川として描かれたアナドゥイリ川は、必ずしもペロフの主張するようにシベリア地図上における最初のものとは言えなくなるが、しかし比較的早期の表現であることは認めてよいであろう。

最後に、スパファリ図のアジア東岸には、さきにも述べたように遠く海中に突出している長大な山脈が描かれている。この描図もまた、スパファリ図にいたって初めて現われた特別に興味深いものである。これについては幾らか詳細な考察を必要とするので、つぎに節を改めて論ずることにしよう。

#### 四、迂回できない山脈の岬

第一図をみるとすぐ気がつくように、スパファリ図の地形にみられる著しい特徴の一つとして、バイカル湖東から北東方へのびる長大な山脈が、海上遠く岬となって突出している異様な表現がある。そしてこの山脈には、既述のように「バイカルから海にいたり、さらに海中にまで達する山脈」という説明文と、「連水陸路は一日で越えられる」という説明の文字が付記されている。この山脈は地図の図郭によって途中で切断されているので、山脈は図郭外へどこまで延びているのか、その末端は不明であるような印象をうける。一七世紀のシベリア地図上において、このようなシベリア北東部の「末



第3図 北東アジアの水系

端の知れない山脈」の突出あるいは「迂回できない岬」の顕著な表現は、スバファリ図が初めてである。この地図を一見すれば当然のこととして、この長大な山脈の岬は何であるのか、スバファリ図にこのような特異の描図がおこなわれたその基礎的な資料は何であったか、という疑問がおこってくる。

筆者がそのような疑問を解決しようとして、一六四九年のミハイル・スタドゥヒン (Mikhail Stadukhin) の請願書 (chelobitnaya) 一六六七年シベリア地図の説明書、一六七三年シベリア地図の説明書、およびスバファリの著作「大河アムールの物語」などを資料として考究しつつあったときに、ソ連のポレヴォイ (B. P. Polevoy) が一九六四年に、「一七世紀におけるアジア北東端に関する地理的観念の形成史。『山脈の障壁』

に関する報道、『迂回できない岬』に関する伝説の発生と後代におけるその変形」というかなり長い論文を発表した。その論考には従来の通説をくつがえした独創的な見解もみられるので、本節では主としてその論文の要点を紹介しつつ、スパファリ図に描かれたこの長大な山脈の突出について論述することにした。

まず筆者の管見によると、アジア大陸北東部に存在する「末端の知れない山脈」あるいは「迂回できない岬」に関係するとみられる最初の資料は、前記ミハイル・スタドゥヒンの一隊が一九四九年七月にコルイマ川口から東方へ航行したとき、北極海沿岸のコリャク(Koryak)族から聞いた情報のなかに見出される。スタドゥヒン等は初めコルイマ川畔にいたとき、そこから順風の航海三日余のところにある黒テンの豊富なボグイチャ川ともコヴィイチャ川ともよばれる大河(Pogycha, Kovycha, これは後で説明するようにチャウン川〔Chanu〕またはアナドゥイリ川と思われる)の存在を伝聞によって知った。そして、この川を発見するためにコルイマ川口から東方へ七昼夜帆走したが、川を発見することができなかった。それで部下を派遣して、沿岸に居住するコリャク族から捕虜をとらえて来させ、大河の所在を尋ねたが、捕虜たちはそのような川は知らぬと答え、そして次のようにのべたのである。

資料Ⅰ(スタドゥヒンの請願書、一六四九年)

「海に近く断崖の山脈があつて、この山脈の末端は誰も知らなう (...vozle morya lezhit kamen utyos, kontsa kamnyu ne znayut)と。

それを聞いたスタドゥヒン等の一行は食糧も不足してきつつかつたので、そこからコルイマ川へ引返した。かれらが引返したその地点は明確ではないが、多分現在のシェラグスキー岬(Shelag'sky mys)付近であつたらうと推測されている(第三図参照)。そして、上記のようにコリャク族の捕虜が言ったという「末端の知れない山脈」は、それが海中に突出しているとは言われていないけれども、あるいはシェラグスキー岬のことかも知れないし、あるいはこの岬からベーリング海峡の南方まで延びているチュコト山脈(アナドゥイリ山脈)を指すのかも知れない。いずれにしてもこのスタド

ウシンの請願書によって、コルイマ川の東方に存在する「末端の知らない山脈」のことが、一七世紀の半ばごろにヤクツク方面のロシア人にも伝わったことが考えられるのである。

さてソ連において、いわゆる「迂回できない岬」に関するロシアの最初の文献を指摘して論じたのは、有名な地理学者ベルク (L. S. Berg) であった。かれはチトフ (A. A. Titov) 編著「一七世紀のシベリア」のなかに入れて公刊された一六七三年シベリア地図の説明書 (Spisok s chertezha Sibirskiya zemli) から、次の資料Ⅱおよび資料Ⅲの部分を指摘した。

資料Ⅱ (一六七三年シベリア地図の説明書、第五章)

「アムール海 (Amurskoye more) によってキタイ帝国にいたる航路はない、なぜならばマンガゼヤ海 (Mangazey-skoye more、西シベリア北岸を洗う北極海—三上注) からアムール海までの全土の周辺には山脈 (kamen) があり、その山脈は海中へ延びていて、これを迂回することは巨大な氷塊が強圧したり粉碎したりするので誰も不可能である。人がこの山脈に登ることはできないが、キタイ帝国への通路はある」<sup>(40)</sup>

右の記事を引用して、ベルクは次のようにいう。ここに初めて、誰も迂回することの不可能な「山脈 (kamen)」の指摘があらわれており、そしてそれ以来この山脈は、シベリア北東部を描いた多くのロシア製ならびに諸外国製の地図上にあらわれている。この「迂回し得ない山脈 (neobkhodimy kamen)」は、その後の諸文献においては岬 (nos) とよばれているが、これは一六四九年にスタドゥヒンを阻止したシェラグスキー岬であるか、あるいはチュート半島である。と。さらにベルクは、同じ一六七三年シベリア地図の説明書のなかで、右の引用文のすこし後にでてくる左記の部分をも指摘している。

資料Ⅲ (一六七三年シベリア地図の説明書、第七章と第八章)

「コルイマ川口からコヴイチャ (Kovycha)、ナナボラ (Nanabora)、イリヤ (Ilya)、ドゥラ (Dura) 諸河川の川口

のかたわらを通り、陸地をまわって、山脈の障壁 (kamennaya pregrada) までは、氷塊が時々そんなことがあるように通航をゆるすならば、帆走して一夏で到達できるが、氷塊が通航をゆるさなければ三年を要する (説明書の第七章)。そしてその山脈は一日で越えられるが、人が山脈の頂上に登るとその人には二つの海—レナ海 (Lenskoye more) とアマール海とが見える。山脈を越えるとアナドゥイリ川に到達し、そこでは魚の骨 (海獣セイウチの骨—三上注) が獵獲されている。そしてその地方には、ギリヤンスキー人 (Gilyanskije Iyudi, ギリヤーク族—三上注) が住んでいる。そしてカムチャッカ川の川口の前面には、途方もなく高い石の塔 (storp kamennyj) が海からそびえたっており、これには誰も登った人がない。そしてギリヤンスキー地方の諸河川にも名前が与えられている。そしてアナドゥイリ川にはラマ川 (Lama, オホタ川 [Okhota] を指す—三上注) とブルードナヤ川 (Bludnaya, オモロン川 [Omolon] を指す—三上注) とへ通ずる二つの連水陸路 (volok) がある。そしてラマ川はアマール海へ流入し、ブルードナヤ川はコルイマ川へ流入し、コルイマ川はレナ海へ流入している。そしてナナボラ川とコヴィチャ川 (チャウン川 [Chaun]—三上注) との間には、山脈の岬 (nos kamennyj) が海中へ延びており、その岬は辛うじて迂回することができた<sup>(4)</sup> (説明書の第八章)。

右の資料Ⅲのほうには、資料Ⅱにみえる「迂回できない山脈」の岬という表現はないが、しかしここにてくる「山脈の障壁」は、資料Ⅱの「迂回できない山脈」の岬と同じものを指しているとベルクはみている。そしてかれの考えによる、ここには互に矛盾する二つの資料が混合しているのであって、一方はコルイマ川からアナドゥイリ川までの航路に「迂回できない岬」の存在を確言するものであり、他方は——チュコト半島を回航したデジニョフ (S. Dezhnyov) のものかも知れないが——困難ではあるが通過しうる航路について物語っている、と解釈するのである。そして「山脈を越える」とアナドゥイリ川に到達する」のであるから、「迂回できない岬」あるいは「山脈の障壁」はチュコト半島であろうと考えるのが、ベルクをはじめ従来の学者の一般的な考え方であった。

しかるに、ポレヴォイは右のような考え方に反対する。かれは資料Ⅲの文章の意味をもう一度よく検討するために、同

じ一六七三年シベリア地図説明書の未刊の他の写本を参照してみた。それは一六七九年にゾロタリヨフ (P. Zolotar'ov) がアストラハンにおいて著作した「アストラハンとシベリアとに関する本 (Kniga o Astrakhani i Sibirii)」のなかに収録されているもので、この写本は現在レンニングラードの国立公共図書館に所蔵されているという。この写本によると、資料Ⅲの初めのところで「イリヤ、ドゥラ」という二つの河名がつづくようになっていて「Ili' in' dury」となっている。ところで、最近発見されたデジニョフの一六五五年の報告書のなかでは、アナドゥイリ川はある一カ所において「アナニディルイ (Anan'diry)」とよばれているので、ボレヴォイは、前記の「イニドゥルイ (in'dury)」はこの「アナニディルイ」の歪曲された名称ではあるまいかと推測し、したがって資料Ⅲの初めの部分は、以前には「Nanabory i' Anan'dyri」と書いてあったのが、不注意な写字生によって「Nanabory i' in'dury」となり、後には「Nanabory i' i' Duri」と変ったのではあるまいかと推測する。つまり、さきにも述べたように、ベルクはナナボラ川はアナドゥイリ川の別名と解釈していたが、まさにその通りに、以前には「ナナボラすなわち、(三)アナドゥイリ」と書いてあったのが、転写の誤りによって仮空のイリヤ川とドゥラ川という二つの河名が生じ、資料Ⅲのような「ナナボラおよびイリヤおよびドゥラ」という文章になったのではあるまいかと、ボレヴォイは推測するのである。さらにかねは、もしもっと古い資料においては、アナドゥイリ川を指して「Anan'dyri」の代りに「スタドゥボン」が書いたような「アヂャニリ (Adyr')」が使われていたとすれば、ロシア語の「すなわち」とか「あるいは」を意味する接続詞「イーリ (ii)」はそれだつづく次の語「Adyr'」の頭初の文字「A」と一緒になつて容易に「イリヤ (Ilyya)」と読まれ、後の「dyr'」あるいは「dyri」は「Duri」となつて残るのであり、誤写によるそのような混乱は、なお一層発生する可能性があるといふ。

右のような推測が可能であるとすれば、資料Ⅲの文章は、「コルイマ川口からコヴィイチャ、ナナボラすなわち、アナドゥイリ諸河川の川口のかたわらを通り、陸地をまわつて、山脈の障壁までは……」となつて、「山脈の障壁」はアナドゥイリ川よりも先の方(南の方)にあることとなる。かくてボレヴォイは、この「山脈の障壁」とか「迂回できない岬」とか

よばれるものは、カムチャツカ半島であると主張するのである。そのように解釈すれば、資料Ⅲの末尾の「辛うじて迂回することができぬ岬」とは、デジニョフが一六四八年に回航したチュコト半島のことであり、他方カムチャツカ半島は一七世紀半ばのロシア人にとっては、当時はまだ克服しえない「障壁(Petegrad)」であった事に合致する、という。

またボレヴォイは次のようにいう。デジニョフの報告書によると、かれらはチュコト半島を「両側から同一の海が洗っている」と考えたので、かれらがシベリアの北方および東方のラプテフ海、チュコト海およびベーリング海を、一つの海「レナ海」と考えたのは自然なことであった。他方、右の地図説明書のなかの「アムール海」はオホーツク海を指したものと解されるので、レナ海(ベーリング海)をアムール海(オホーツク海)から区分している「山脈の障壁」あるいは単に「山脈」というのは、疑いなくカムチャツカ半島であると。

また資料Ⅲには、「山脈は一日で越えられるが、人が山脈の上に登るとその人には二つの海—レナ海とアムール海とが見える」と書かれている。ボレヴォイによると、カムチャツカ半島の最少の幅のところは約九〇露里(ツェルヌヤ)(約九六キロメートル)で、クラシエニニコフ(S. Krasheninnikov)やデリヴロン(Delivron)の著書のなかには、ここでは主山脈の峠から上天気の日には二つの海—ベーリング海とオホーツク海—が見えるという記載がある。そして古くからこの地峡の峠道を越える交通路の一つが、オホーツク海側のレスナヤ川(Lesnaya)の上流からベーリング海側のカラガ川(Karatga)の上流へと通じており、ここで「山脈を越えて」移動することは一日で可能であるという(第二図、第三図参照)。なお資料Ⅱには「人がこの山脈に登ることはできないが」という文句があつて、資料Ⅲの「山脈は一日で越えられる」という文句と矛盾するように見えるが、登ることのできない山脈というのは、その前文にのべられているシベリアの「全土の周辺」にある山脈を指しており、それはすなわちウラル山脈からアルタイ山脈、サヤン山脈、ヤブロンノヴィ山脈、スタノヴォイ山脈、ジューグジュール山脈などにいたるシベリアの西から南および東をとりまく諸山脈を指すのであつて、「一日で越えられる」山脈とは別のものであり、ここに矛盾はないと解釈するのである。<sup>(註)</sup>

以上のように、一六七三年シベリア地図の説明書の記事は、「山脈の障壁」をカムチャツカ半島と解釈するポレヴォイの考えによって、よく説明されるようにみえる。しかしなお問題となるのは、資料Ⅲに「山脈を越えるとアナドゥイリ川に到達し……」と書かれている点である。この文句を読むと誰でも、それゆえアナドゥイリ川は北極海側から「山脈の障壁」を越えた彼方（南方）にあったのだと結論する。ベルクをはじめその他の学者たちおよび一七世紀の一部の人々までが、「山脈の障壁」をチュコト半島と考えたのは、疑いなくそのゆえである。しかしポレヴォイは、前述のように現存する一六七三年シベリア地図の説明書には後代の誤写があるとし、もとの原本の文章では、ナナボラ川（アナドゥイリ川の別名）が「山脈の障壁」までの所に（山脈より北方に）あることを明瞭に示していたと推論した。さらにかれば、一六七三年シベリア地図の説明書（資料Ⅲ）の基礎には、それに先だつ一六六七年シベリア地図の説明書（資料Ⅳ）があつて、しかも前者は後者の文章を省略して利用したので、前者の文章だけを読む者はその文句が初めにもつていた意味を誤解するような文章になった、と主張する。

すなわち、一六六七年シベリア地図の説明書の諸写本のうち、中央国立古文書館のシベリア省関係文書、巻物八六七（Ts.G.A.D.A., Sibirsky Prikaz, stolb. 867）のなかに保存されているもの<sup>(15)</sup>、レニングラードの国立公共図書館写本部分、エルミターージュ蒐集品第三七六号（G.P.B., Rukop. otd., Ermitazhn. sobr. No. 376）という写本とを、ポレヴォイが比較したところ、後者のほうには前者にはない「敵対する諸国（nemirnie zemitsy）」に関する次のような記載があるという。

資料Ⅳ（一六六七年シベリア地図の説明書、エルミターージュ第三七六号写本）

「カリュム川（Kalyzn, ユルイマ川―三上注）の川口から陸地のそばを通って、南方へのびてゐる山脈の岬（nos kamen-ny v poludennuyu stranu）までは、氷が通航をゆるすならばコチ船（koch, その時代にロシア人が沿岸航海に使っていた小型船―三上注）で帆走して一夏で到達できるが、氷が通航をゆるさなければ三年を要する」



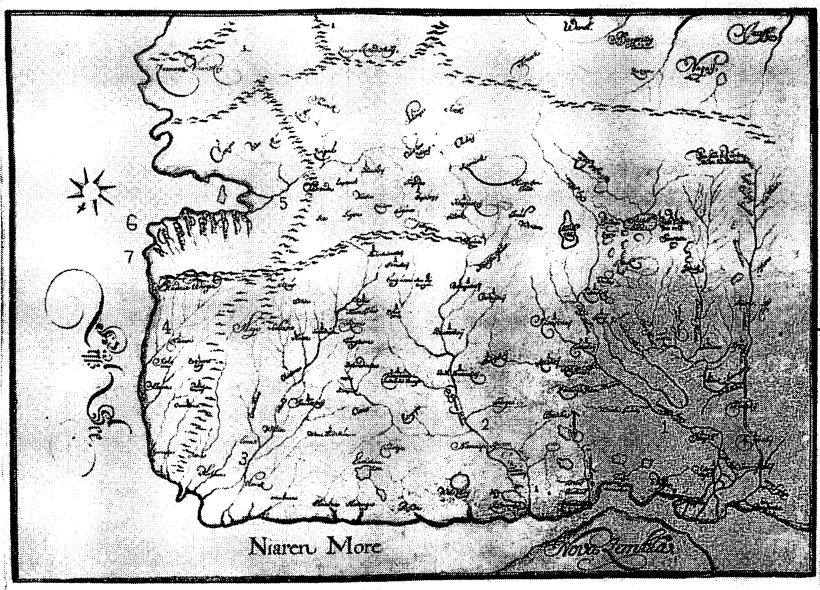
「そしてカルイム川にはブルードナヤ川 (Bludnaya, オモロン川—三上注) が流入し、この川の沿岸には毛皮税を集める冬営所があり、その冬営所からブルードナヤ川に沿つて上流へ連水陸路 (volok) までは八週間かかる。そしてその連水陸路を越えてアドゥイム川 (Adym reka, アナドゥイリ川—三上注) までの行程は三日である。そしてアナドゥイム川 (Nadym reka, アナドゥイリ川—三上注) は海中にのびている岬のかなたにあり (za nosom v more)、人々はその川の沿岸で骨 (セイウチの牙—三上注) を獮獲するために出かけて行く。そしてその山脈 (kamen) を越えて海から海への移動路があり、人がその山脈の頂上に登るとその人には二つの海が見える。山脈の岬は東の方へ行き、そして北へ曲るが、その末端は誰も知らない。南方へのびているその山脈 (tot kamen na polden) からアムール川の川口までには八つの川が流出し、それら諸河川の川口の前面には非常に高く石の塔 (storp kamennoy) が海からそびえたっており、これには誰も登った人がない」

ポレヴォイは右の資料Ⅳの文章のなかには、前掲の資料Ⅲの文章が幾分表現を異にして存在することを確認できるとし、それゆえに資料Ⅳの文章を、資料Ⅲのなかの意味不明の文句を解釈するのに利用しても正当であると考へる。そして次のように言うのである。今日までわれわれが、「山脈を越えて (cherez kamen)」アナドゥイリ川へ移行するという資料Ⅲの文句を読んだときには、そこで物語られているのはコルイマ川からアナドゥイリ川の上流へむかう伝統的な道——すなわちコルイマ川の比較的北方の支流アニユイ川 (Anyuy) に沿つてそして「山脈を越える」道——であるように思われた(第三圖参照)。しかし意外にもいまや資料Ⅳによって明らかになったことは、ここで物語られているのは全然別の道——すなわちブルードナヤ川 (人々は当時コルイマ川の比較的南方の支流オモロン川 [Omolon] をこのように呼んだ——ポレヴォイ注) の上流からアナドゥイリ川へ移行する道——であることだ。その道はオホーツク海へ流入するペンジナ川 (Penzhina) を渡り、正にかの山脈 (それは一七世紀の陸路旅行者の考へでは、それから南方へ向きをかえて、カムチャツカ半島の主脈を形成しつつ、海中に没するものであるが—ポレヴォイ注) を越えて通っていた。「山脈を越えて」

アナドゥイリ川に到達する道をこのように解釈すると、ここでもまた、一六七三年シベリア地図の説明書のなかで「山脈の障壁」とよばれているのは、カムチャツカ半島であるという結論の正当なことが確認される、と。

さらにポレヴォイは、従来一六七三年シベリア地図の複写であると思なされてきた二つのスウェーデンのシベリア全図、すなわちパルムクヴィスト (E. Palmqvist) の複写図 (一六七三—七四年、第四図参照) とスバルヴェンフェルト (J. G. Sparwenfeld) の複写図 (一六八四—八七年) とが、<sup>48)</sup> 右の資料IVをふくむ写本 (エルミタージュ蒐集品第三七六号) の内容に非常に近似しているので、この写本は、これらスウェーデンの二つの地図が複写されたものロシアの原図に対して特別につくられた「説明書」である、と考えることさえ可能であるという。ところで、ポレヴォイも以前にはこれら二つのスウェーデンの複写図を、一六七三年シベリア地図の複写であるとする考えをもっていたが、<sup>49)</sup> これらスウェーデンの二図と写本第三七六号の内容との一致を知るにいたった一九五五年以後はその考えを改めて、それら複写図のロシアの原図は、一六六七年一月一日に作製されたいわゆる「ゴドゥノフのシベリア地図」よりすこし先立って、同じ一六六七年にトボリスクで作製されたものであるとする新しい考え方をしている。<sup>50)</sup> そのことは今はとにかくとして、かれはスウェーデンの二つの複写図と資料IVをふくむ写本第三七六号の「説明書」の記事内容とが非常に近似しているので、前掲の資料IVの文章の意味が不明瞭なところを理解するのに、これらの複写図をみれば役に立つというのである。

すなわちスウェーデンの二つの複写図をみると、資料IVの「南方へのびている山脈の岬」あるいは資料Ⅲの「山脈の障壁」に該当する陸地の突出は、これらの地図上に記入されている「Adir」川と「Zudon」川との間に描かれている。この「Adir」川は資料IVの「アドゥイム (Adym)」川であることは疑いなく、それは即ちアナドゥイリ川である。他方の「Zudon」川とつづのは、ヤクーツクの古文書にしばしばみられる「Chendon」川あるいは「Chudon」川である。そして当時「Chendon」とか「Chondon」とかよばれた川は、スタドゥンが書いてるようにオホーツク海側へ流入する現在のギシガ川 (Gizhiga) であった。つまり「山脈の岬」あるいは「山脈の障壁」は、これらスウェーデンの複写図で



第4図 パルムクヴィストのシベリア全図(1673—1674年複写)。(Nordenskiöld, A. E.: Periplus. Stockholm, 1897.による)

図の上側が南, 左側が東である。1—オビ川, 2—イェニセイ川, 3—レナ川, 4—コルイマ川, 5—アムール川, 左上の大湾入はオホーツク海。ポレヴォイは6の岬がカムチャツカ半島であり, 7の岬がチュコト半島であると主張する。

はアナドゥイリ川とギジガ川との間に描かれてあり、「山脈の岬」あるいは「障壁」が疑いなくカムチャツカ半島であったことを納得させるというのである。

また資料Ⅳには、「南方へのびているその山脈からアムール川の川口までには八つの川が流出し……」と記載されている。実際それら二つの複写図の上でアムール川口から八つの川を数えてみると、「Chyndon」川(ギジガ川)は八番目であるが、「Adir」川(アナドゥイリ川)は九番目の川であることが確認される、という。

そしてポレヴォイは、資料Ⅳのなかに「ナアドゥイム川(即ちアナドゥイリ川—ポレヴォイ注)は海中にのびている岬のかたにあり……」という一句があるが、この岬は「障壁」とは別の岬であることが二つの複写図からわかるとし、この岬は二つの複写図の上では、アナドゥイリ川より北方にゆるやかな曲

線で描かれている岬、すなわちチュコト半島であり、それはまた一六七三年シベリア地図の説明書(資料Ⅲの末尾)に、「その岬は辛うじて迂回することができると書かれている岬である、<sup>51)</sup>という。

要するに前記のベルクは、資料Ⅲの文章は前後矛盾する資料の混合ではなく、そこでは二つのあい異なる半島——すなわち一方は「その岬は辛うじて迂回することができると書かれているチュコト半島、他方は「山脈の障壁」と書かれているカムチャツカ半島——について言及されていることを気付かなかつたのである、とポレヴォイは結論するのである。<sup>52)</sup>

なお資料Ⅳの末尾のほうに、「山脈の岬は東の方へ行き、そして北へ曲るが、その末端は誰も知らない」という一句がある。この一句の出所と意味の解明はまだポレヴォイにも十分にはできていないが、かれは一つの説明の仕方として北極海沿岸に関する情報がそこへ混入したことを考え、次のようにのべている。ここには一六四九年のスタドゥヒンの請願書にみえるコリヤク族の言葉——「海に近く断崖の山脈があつて、この山脈の末端は誰も知らない」(前掲資料Ⅰ)——が反映しており、そしてそれが誤解されているのではあるまいか。これは北極海の沿岸に関する情報であつて、北極海の沿岸については、コリュチンスカヤ湾 (Kolychinskaya guba) のところでは「東の方へ行き、そして北へ曲る」と言われる、<sup>53)</sup>と。

また、「山脈の障壁」をカムチャツカ半島とする結論は、一七世紀半ばごろのロシア人がもつていた北東アジアに関する地理知識と矛盾することはないか、という疑問にたいしては、ポレヴォイは何も矛盾しないと答えて次のような諸事実を挙げている。すなわちコサツクのチュキチェフ (F. A. Chyukichev) の報告から判断すると、ロシア人はすでに一六五〇年代の末には、オホーツク海側のペンジナ川流域から、カムチャツカ半島北部の地峡を越えてベーリング海方面へ、セイウチの牙を集めるために往来していたことがわかる。また一七世紀の半ばごろには、カムチャツカ半島北部の地峡を横断する最短路がそれに沿っていたレスナヤ川の沿岸には、ロシア人フェドトフの冬営所 (Fedotovskoye zimovye) などもあつたようである。

そのうえ、ロシア人がカムチャツカ半島の奥地へ進出したのも、すでに一七世紀半ばごろに始まったことである。すなわちコサックのカムチャトイ (I. I. Kanchatoy) は、一六五〇年代の末にこの半島へ行ったのであり、「カムチャツカ川」の名称は、この人の姓にちなんで呼ばれたものである。その後一六六〇年代には、コサックの十人長ルベツ (I. M. Rubets) がカムチャツカ川の上流へさかのぼって進軍したし、同じ場所へ多分前記のチュキチェフも、一六六〇—一六一年の冬に行ったようである、と。

以上の紹介によって、一七世紀半ばすぎのロシアの諸資料のなかで「山脈の障壁」とか「迂回できない山脈」の岬とかよばれているものは、本来カムチャツカ半島であったと主張するポレヴォイの論旨を、ほぼ理解することができようと思う。それでは、右にかかげた諸資料はスバファリの著作および地図にたいして、どのような影響をあたえたのか。これが最後の問題として残っている。

スバファリの著作としては、すでに第二節でのべておいた「大河アムールの物語 (Skazanie o velikoy reke Amure)」のほかにも、それと近似する内容をもつ他の写本、「大河アムールの記述 (Opisanie velikoy reki Amura)」というものがある。諸学者の一般的な考えでは、「記述 (Opisanie...)」に基づいて後に「物語 (Skazanie...)」が書かれたとみるようであるが、今ここでは両者の先後関係はあまり問題にする必要はない。「物語」の場合と同様にこの「記述」のほうにも数種の写本があって、ポレヴォイは、ソ連科学アカデミー歴史学研究所レニングラード支部の図書館に保存されているヴォロンツォフ蒐集品第二八九号 (Kollektsiya Vorontsovykh, No. 289) という写本から、次のような「記述」の文章を引用している。「」のなかがその原文である。

資料 V (大河アムールの「記述」および「物語」)

シベリアの東方には海による北方からの「通路はない」、その理由は次のようなことらしい、「航路は壁のような山脈の障壁 (kamennaya koroga) によって遮断されており、それを迂回して航海することは、夏でも流動する大きい氷塊が

通過をゆるさないので不可能である」、しかしその場所には陸上の移動路がある、「そしてアナドゥイ川 (Anadyr, アナドゥイリ川—ポレヴォイ注) は山脈 (Kamen) から流出し、その山脈はバイカルの深淵から始まって海中にまで壁のようになって延びており、その末端は誰も知らない。そしてその山脈は一日で越えられるが、その頂上からは二つの海が見える。そしてそこからコルイマ川までは、コチ船で帆走して一夏で行ける。しかし氷塊が通過をゆるさなければ三年かかる、そしてアナドゥイリ川の上流からその山脈を越えてブルードナヤ川畔へ連水陸路 (Volk) があり、ブルードナヤ川はコルイマ川へ流入する。そしてこれらの所はシベリアの土地の辺縁であり果てである」と。

なお「大河アムールの物語」のこの部分も、右の「記述」の文章とほとんど同じであるが、語句に多少の出入りがあるので念のために、長大な山脈に関する部分の記述を摘記してみると左のとおりである。

「そしてアナドゥイリ川は山脈 (Kamen) から流出し、その山脈はバイカルの深淵から起って海に達し、さらに海のかなかへ壁のようになって延びており、末端は誰も知らない、氷塊が通航をゆるさないので迂回はできない。そしてその山脈を越えて横切るのは徒歩で一日であり、その頂上からは両側に二つの海が見える……」

さてポレヴォイは、前記スパファリの「記述」の文章は疑問の余地なく、一六六七年シベリア地図の説明書(資料Ⅳ)の転載であると言ひ、この説明書に基づいて後に一六七三年シベリア地図の説明書(資料Ⅲ)のなかの「山脈の障壁」に関する報道が書かれたと言う。したがってスパファリ図にこの「山脈の障壁」、すなわちカムチャツカ半島が表現されていることは確言できる、と主張する。すなわちスパファリの地図上には、かの「山脈越え」の移動路の位置が、まさに海中へ突出している山脈の付根のところに、すなわち正にオホーツク海側のレスナヤ川を經由してベーリング海側のカラガ川へゆく古来の移動路があった場所に、おかれているのは良く事実を証明している。そのうえなお特徴的なことには、スパファリ図のその「山脈越え」の移動路のところには、「連水陸路は一日で越えられる (Volk khodim den)」という記載があり、これは一六七三年シベリア地図の説明書(資料Ⅲ)のなかにある「その山脈は一日で越えられる」という文句

と正確に一致している、と(第二図参照)。

以上かなり詳細にポレヴォイの所論を紹介したが、要するに、スパファリ図のうえでバイカル湖から北東にのびた長大な山脈が海中にまで突出している表現は、一六七三年シベリア地図の説明書にみえる「山脈の障壁」すなわちカムチャツカ半島であるというポレヴォイの主張は、十分の説得力をもっており是認できるように思われる。しかもその山脈は、スパファリ図のうえでは図郭の外までのびて、なおどこまで続くかわからないように描かれている。本来はカムチャツカ半島であるという山脈がそのような姿に表現された理由を考えてみると、この山脈は、スパファリの著述「大河アムールの物語」や「記述」のなかに書かれているように「その末端は誰も知らない」山脈であることの反映であろうと思われるが、なおその上に、この山脈はアメリカまで延びているらしいという当時の地理的觀念の裏付けがあったと推測されるのである。すなわち、スパファリの「シベリア旅行記」の一六七五年九月二日のところには、バイカル湖の付近から「海に達し、そして海中に壁のようになって延びており、その末端は誰も知らない」山脈について書いた後に、次のような記述がつづいているのである。

資料VI (スパファリのシベリア旅行記、一六七五年九月二日)

「その山脈は西インド諸島まで、新世界まで (do Novovo Sveta) 達するといわれている」と。

最後に、この「迂回できない山脈」の岬とか「山脈の障壁」などと呼ばれているものは、たとえその時代にはまた「カムチャツカ半島」とは呼ばれていなかったにしても、何か固有の名称で当時の文献のなかに記載されている事例はないのかという疑問に答えておく必要がある。そこでスパファリの「シベリア旅行記」を調べてみると、かれが清国へ行く途中で一六七五年一〇月二日にセレンギンスクに到着して、レナ川について書いた記事のなかに次のような文章がある。

資料VII (スパファリのシベリア旅行記、一六七五年一〇月二日)

「そしてレナ川とアムール川との間にある地方は大層幅ひろく長い、というのはこれら二つの川の間には一大山脈があ

るからで、それはバイカルに始まって海に達するばかりでなく遠く海中へ突出している、陸路によっても海路によっても誰もそれを迂回できない。これは地理学者たちによってカニノス (Kaniinos) とよばれ、わが国人たちによってソバチア (Sobatchia) [Dog Cape—ベクトレー注] とよばれる海岬である。そしてその山脈からすべての川は一方の側ではアムール川に向って流れ、他の側ではレナ川に向って流れる<sup>65)</sup>」

右のスパファリの文章によると、この岬の呼称は「カニノス (カニ岬)」あるいは「ソバチア (大岬)」であることが明瞭である。そのほか、「大河アムールの物語」および「記述」のなかに「スヴィヤトイ・ノス (Svyatoy nos, 聖なる岬)」というものがあり<sup>66)</sup>、これもよく調べてみなければ判らないが、あるいはカムチャツカ半島を指す場合があるかも知れない。興味あることにはスパファリの旅行から約一〇年ほど後で、一六八九年に露清間に締結されたネルチンスク条約の交渉中にも、右の「山脈 (les montagnes de pierre)」のことや「聖なる岬 (le nez ou cap Saint)」のことが、両国の交渉者間の話題にのぼったようである<sup>67)</sup>。またバグロフによると、このとき清国側はロシア側の地図に山脈 (the Khingán ridge, 興安嶺) が海中まで突出しているように描かれているのを見て、露清間の国境線をバイカル湖からその山脈沿いに海まで引くことを要求したという<sup>68)</sup>。ロシア側はスパファリ図のようなシベリア地図をもっていて、それを清国側に見せたのであろう。なおついでながら、ネルチンスク条約の満州文のもっとも正確な漢訳をのせている西清の「黒竜江外紀」などをみると、そのころ清国側では、ロシア側の地図に描かれたその長大な山脈 (ヤブロノヴィ山脈およびスタノヴォイ山脈等) を、大興安嶺とか外興安嶺とか呼んでいたことがわかる<sup>69)</sup>。

しかし、スパファリはこれらの「カニノス」、「ソバチア」、「スヴィヤトイ」などの岬の名称をどんな資料から得たのか、またこの時代の清国側の北東アジアに関する地理的知識はどの程度であったかなどについては、今は明らかにすることができなかったもので、それらの考証は他日を期して、一応スパファリ図に関するこの論考を終ることにする。

## 付 記



本稿とは直接関係がないので省略したが、ポレヴォイ論文の後半においては、本来カムチャツカ半島であった「山脈の障壁」が、その後誤解によってチュコト半島と解釈され、種々の地図上にもそのように描かれるようになった過程について、かなり詳細に論じられている。誤解をひきおこす主要な原因となったのは、既述のように、一六七三年シベリア地図の説明書(資料Ⅲ)のなかで、ブルドナヤ川の上流からアナドゥイリ川へ移行する道の記載が、もとの一六六七年シベリア地図の説明書(資料Ⅳ)よりも短縮されて、「山脈を越える」とアナドゥイリ川に到達する」という簡単な文句になったことである。これを読んだ人々は、この道はコルイマ川の支流アニューイ川から「山脈を越えて」アナドゥイリ川の上流へゆく伝統的な移動路であると考えて、「山脈の障壁」を機械的にチュコト半島のこ

と解釈してしまった。

それとともにまた、「ナナボラ川すなわちアナドゥイリ川」という原本の文句が誤写されたために、すでに一六七〇年代の初めごろからトボリスクにおいてもモスクワにおいても、地図製作者にシベリア北東には「ナナボラ」、「イリヤ」、「ドゥラ」、および「アナドゥイリ」という四つの川があるという間違つた観念をもたせざる結果となり、しかもアナドゥイリ川は「山脈の障壁」より先に(南方に)あると思わせるようになった。

そういう誤解に基づく混乱は、一六八四年シベリア地図、ヴィトセン(N. K. Vitsen)の一六八七年タタリヤ地図、スパルヴェンフルトによって一六八九年に複写されたシベリア全図の一つ、またレメンゾフ(S. U. Remnizov)の若干の複写図などにみられる、とポレヴォイは論じている。

わが国でも、一七一―一八世紀の地図にみられるアジア大陸北東部のそのような特徴的な岬の突出については、船越昭生氏が論じておられるのでその論文を参照されたい。<sup>(65)</sup>しかし同氏が別の論文において、スパファリは一六七六年に北京でイェズス会士フェルヒースト(F. Verbiest, 南懷仁)からシベリア全図を贈与されたと推測し、その地図には東海への山稜の突出が描かれてあつたはずであると推測し、そしてその地図の影響をうけた結果、スパファリ図にはあの特徴的な海中へ突出する山脈が描かれたと推測されているのは、如何であろうか。すでに本稿で「資料」としてかかげ論述したように、ロシア側にはその山脈に関してはスパファリの使節旅行以前の文献が幾つかあつて、スパファリには、かれが一六七六年旧暦五月一五日に北京に到着する以前においてもすでに、スパファリ図にみられるあの特徴的な山脈の突出を描くことになるであろう条件が、十分にそなわつていたように思われるのである。

## 結 言

ニコライ・スパファリはロシアの使節としてシベリアを横断し、モスクワと北京の間を往復した(一六七五―一六七八

年)。かれはロシア外務省からシベリア地図の作製を命じられていたので、多分、一六七八年にその地図をロシア外務省に提出したものと考えられる。

その地図かあるいはその複製かと推定されるユーラシア大陸図が、バグロフの所有に帰した。その地図上では、シベリアを横断する主要交通路の沿道およびアジア北東部の表現が、それまでの一七世紀のシベリア諸地図より格段に詳細正確になっている。この地図の中国の部分は、マルチニの「中国新地図帳」のなかの中国全図を利用して描かれている。

このいわゆる「スパファリ図」の目立った特徴として、バイカル湖東から北東方へのびる長大な山脈が海上遠く突出して、それがどこまで延びているのか判らないような異様な表現がある。ソ連のポレヴォイはこれは本来カムチャツカ半島であると結論したが、その結論は是認できる。

この山脈は、一六六七年と一六七三年との二つのシベリア地図説明書およびスパファリの著述「大河アムールの記述」などに記載されている。「迂回できない山脈」あるいは「山脈の障壁」の表現である。スパファリは、「この山脈の末端は誰も知らない」と考え、また「この山脈は新世界まで達している」という噂も知っていたので、本来カムチャツカ半島であるこの山脈をこの地図のように描いたものと考えられる。

#### 注

- (1) 三上正利、一七世紀のロシア製シベリア諸地図。(歴史地理学紀要、第四集)。昭和三七年。同、一六六七年シベリア地図の目録原文の公刊。(人文地理、一五卷六号)。昭和三八年。同、一六七三年のシベリア地図。(人文地理、一六卷一号)。昭和三九年。

- (2) Bagrow, L.: Sparwenfelds map of Siberia. (Imago Mundi, IV, Stockholm, 1947). pp. 65-70.

#### (3)

スパファリの生年については、以下バッドレーの見解を参照しておく。すなわち、スパファリの生年は地方当局者によれば一六二五年である。しかし一六七六年に、康熙帝が耶蘇会士フェルビースト (Fr. Verbiest) を通じてスパファリに質問したとき、スパファリは「四〇才」と答えているので、かれの生年には疑問が残っている。いずれにしても、生年は一六二五年以前ではなく一六三五年以後でもない、とバッドレーは記述している。Baddeley, J. F.: Rus-

- sia, Mongolia, China, vol. II. London, 1919, p. 205.
- (4) Baddeley, J. F. : *ibid.* pp. 205-207. Andreyev, A. I. : *Ocherki po istochnikovedeniyu Sibiri*. vypusk 1. XVIII vek. Moskva, 1960, str. 73-75.
- (5) スウェーデンが携行したロシア皇帝の勅書は正副二種ありて、正本にはスウェーデン大使 (posol) としてあり、副本には公使 (poslannik) としてあり。正本は清国皇帝にスウェーデン自ら奉呈すべきものであり、そのことを拒否された場合には、ロシア皇帝の対面を保つために副本の方を渡すやうに命令されていた。実際には後者の場合が起つたので、カーブンの謄本もやうにスウェーデンは形式上は公使であったこととなる。しかし実質的には大使であった。
- Baddeley, J. F. : *ibid.* p. 241. Cahen, G. : *Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand (1689-1730)*. Paris, 1912, p. 22, note 3. カーブンの謄本『露文交渉序略』昭和十六年。一三頁。注③。
- (6) Andreyev, A. I. : *ibid.* str. 75. Baddeley, J. F. : *op. cit.* pp. 242-243. Shebenkov, V. G. : *Russko-Kitaiskie otnosheniya v XVII v. Moskva, 1960, str. 168.*
- (7) Andreyev, A. I. : *op. cit.* str. 75. Baddeley, J. F. : *op. cit.* p. 214, note 2.
- (8) 三十五利、西シベリアの民族をよびウラヤ越え交通路。(『東瀛』十二輯)。昭和三十一年。六十九頁参照。
- (9) Andreyev, A. I. : *op. cit.* str. 76. Baddeley, J. F. : *op. cit.* p. 242 ff.
- (10) Zapiski RGO po Otdeleniyu etnografi. 1882. t. X, v. 1, str. 30-150. Andreyev, A. I. : *op. cit.* str. 76-77.
- (11) Baddeley, J. F. : *op. cit.* pp. 242-285.
- (12) Bagrow, L. : *The first Russian maps of Siberia and their influence on the West-European cartography of N. E. Asia.* (Imago Mundi, IX, Stockholm, 1952), p. 84.
- (13) Bagrow, L. : *Sparwenfeld's map of Siberia.* (Imago Mundi, IV, Stockholm, 1947), pp. 65-70.
- (14) Yefimov, A. V. red. : *Atlas geograficheskikh otkryty v Sibiri i v severo-zapadnoy Amerike XVII-XVIII vv. Moskva, 1964. Kommentarii k kartam i rasshirovki legend.* str. 20. 参照。この地図帳の巻末には、地図帳のなかのスウェーデン図をよびそのほか多数の地図にロシア語の古風な筆記体なよび記入をわづらひる読みとく地名や文句を、すべて活字体で印刷して一覽表にしてあるのペペリヤおよび北太平洋方面に関する古地図の研究には非常に便利である。
- (15) Baddeley, J. F. : *op. cit.* p. 161, note D. スイコフの旅行路についての詳細な、最近まで公刊された左記のスイコフの旅行報告書によつて知ることができぬ。Demidova, N. F. i V. S. Mysnikov : *Pervye Russkie diplomaty v Kitaye.* (《Rospiis》 N. Petlina i stateinie spisok F. I. Baikova). Moskva, 1966, str. 113-126.

- (19) Belov, M. I.: *Semyon Dezhnyov*. Moskva, 1955. str. 116.
- (17) Andreyev, A. I.: *op. cit.* str. 55.
- (18) Belov, M. I.: *ibid.*
- (16) スパフマリが中国への旅行中、一六七五年五月三日に西シベリアのトボリスクを出発してイルチシ川を下航してゐる途中で、五月一〇日にサマロフスキー宿場から皇帝あてに出した手紙には、「この手紙に付けて一葉の地図を送つた」云々の記事がある。バッドレーによると、そのとき送られた地図はロシア外務省古文書室の中国関係文書のなかからは失われてゐるが、当時モスクワに地図が到着したことを証する記録がある。『その地図は手紙に糊着されてゐた』と記載されている。(Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 247, and note 1)
- それはこのちやうな内容の地図であつたかわからぬが、スパフマリがこれからシベリア横断旅行を始めようとする時に描つたものであるから、それは本稿の「スパフマリ図」と同様の地図であらう。
- (20) Ttov, A. A.: *Sibir v XVII veke*. Moskva, 1890. str. 103-113.
- (15) Baddeley, J. F.: *op. cit.* pp. 237-241.
- (14) Berg, L. S.: *Otkrytie Kamchatki i ekspeditsii Beringa 1725-1742*. Leningrad, 1935. str. 46.
- (13) Grekov, V. I.: *Ocherki iz istorii russkikh geograficheskikh issledovaniy v 1725-1785 gg.* Moskva, 1960. str. 273.
- スパフマリがすでに一六七五年末ごろに何か「アムール川に関する特別の記述」を書いたことは推測されるが、それが何であつたかは確定できぬ。(後田注 (56) Polevoy, B. P.: str. 246. Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 315)
- またスパフマリの「中国誌」の記事によつて判断するに、「大河アムールの物語」あるいは「記述」は、スパフマリが北京からの帰途一六七七年一月二三日に著作を完了したと云つ「中国誌」よりも、後に著作されたものと推定される。(Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 225, note 1)
- (24) Bagrow, L.: *A few remarks on maps of the Amur, the Tartar Strait and Sakhalin*. (Imago Mundi. XII. Leiden, 1955). p. 128.
- (25) Andreyev, A. I.: *Cherteghi i karty Rossii XVII veka, naidennie v posledovennye gody*. (Smirnov, I. I. otv. red.: *Voprosy ekonomiki i klassovykh otnosheniy v russkom gosudarstve XII-XVII vekov*. Moskva, 1960). str. 85.
- (26) The atlas of Siberia by Semyon U. Remezov. Facsimile edition with an introduction by Leo Bagrow. The Hague, 1958.
- (27) Baddeley, J. F.: *op. cit.* pp. 208-209. スパフマリ図の「中国誌」や“Description of China”の註文による。
- (28) Andreyev, A. I.: *Ocherki po istochnikovedeniyu Sibiri*. vypusk 1. XVII vek. Moskva, 1960. str. 80, 76.

- (37) Baddeley, J. F.: op. cit. p. 420, note 2.
- (38) アンソニー・バドレーの「中國誌」の末尾には「一六四四年一二月三日の著述や記述」に「北極圏の北緯をめぐり」(Andreyev, A. I.: ibid. str. 79). それに、スベトマリが北京からヤクツクに帰着する途一カ月前の旅行中のことであるから、これはヤクツクの「中國新地圖帳」を旅行中に編纂しながら「中國誌」の原籍や執筆したものと推測される。
- (39) Czacznak, B.: The seventeenth century maps of China. An inquiry into the compilations of European cartographers. (Imago Mundi. XIII. Stockholm, 1956). pp. 116-136.
- (40) Bagrow, L.: A few remarks on maps of the Amur, the Tartar Strait and Sakhalin. (Imago Mundi. XII. Leiden, 1955). p. 128.
- ※ヤクツクに「大田四世」マートル川や川口が「下船し」シベトマリに「大田九年」アムール川の中流まで「下船」した。
- (41) Polevoy, B. P.: Pervootkryvateli Sakhalina. Yuzhno-Sakhalinsk, 1959. str. 35-36.
- サハリン島(樺太島)はスベトマリ図には描かれてはな  
らけれども、スベトマリ著作「大河アムールの物語」に  
は「この島の住民の生活状態に關する記述がある」。左記參  
照の如く、Polevoy, B. P.: ibid. Baddeley, J. F.: op.  
cit. p. 240.
- (42) Belov, M. I.: Semyon Deghnyov. Moskva, 1955. str. 116.
- (43) Polevoy, B. P.: K istorii formirovaniya geograficheskikh predstavleniy o severo-vostochnoy okonechnosti Azii v XVII v. (Sibirskiy geogr. sbornik. 3. Moskva, 1964). str. 246.
- (44) Polevoy, B. P.: ibid. str. 243-244.
- (45) Polevoy, B. P.: K istorii formirovaniya geograficheskikh predstavleniy o severo-vostochnoy okonechnosti Azii v XVII v. (Izvestie o «kamennoy peregrade»). Vozniknovenie i dalneishaya metamorfoga legendy o «neobkhodimom nose»). Sibirskiy geograficheskiy sbornik. 3. Moskva, 1964. str. 224-270.
- (46) 本誌の註(註)參照。Belov, M. I.: Semyon Deghnyov. Moskva, 1955. str. 55.
- (47) Polevoy, B. P.: ibid. str. 242. Belov, M. I.: ibid. str. 84. Golder, F. A.: Russian expansion on the Pacific 1641-1850. Cleveland, 1914. p. 72, 275.
- (48) Titov, A. A.: Sibir v XVII veke. Moskva, 1890. str. 49. Berg, L. S.: Otkrytie Kamchatki i ekspeditsii Beringa 1725-1742. Leningrad, 1935. str. 41.
- (49) Titov, A. A.: ibid. p. 53-54. Berg, L. S.: ibid. str. 42-45.
- (50) Polevoy, B. P.: O tochnom tekste dvukh otpisok Semyona Deghnyova 1655 goda. (Izv. AN SSSR. Ser. geogr. 1965. No. 2). str. 108.

- (43) Polevoy, B. P.: K istorii formirovaniya... 1964. str. 226.
- (44) *ibid.* str. 227.
- (45) この写本は、いわゆる「ゴドゥノフのシベリア地図」「一六六七年」とともに、西シベリアのトボリスクからモスクワのシベリア省へ送られたこの地図の「説明書」で、地図とともに一六六八年一月三日に同省に到着し、今日まで保存されたものである。この「説明書」の内容は、一六六二年にゴリデンベルク (L. A. Goldenberg) によって初めて公刊された。三上正利「一六六七年シベリア地図の目録原文の公刊。(人文地理「一五巻六号」昭和三八年。参照)
- (46) Polevoy, B. P.: *ibid.* str. 228.
- (47) *ibid.* str. 229.
- (48) 三上正利「一六七三年のシベリア地図。(人文地理「一六巻一号」昭和三九年)。二〇—二六頁。
- (49) 同右「三一—三六頁。
- (50) Polevoy, B. P.: *op. cit.* str. 236-237.
- (51) 資料Ⅲの末尾にみえる「辛うじて迂回せざる脚」は、「ナボラ川とコヴィチャ川との間にある」と書かれてゐる。ナボラ川は、本文のほうで記述したように、ヘルクもホレヴォイもアナドゥイリ川の別名と考へてゐる。
- コヴィチャ川についてはホレヴォイは何の説明もしていないので、筆者がここに少し補足しておくことにする。フロフの詳細な考証によると、コヴィチャ川 (Kovycha) は他の古文書にポグィチャ川 (Pogycha) と書かれてゐる。
- スパファリのシベリア地図 (三十一)
- (52) 同じ川であり、一六四七年ごろまでは、コルヌマ川の東方のチャウン湾に流入するチャウン川 (Chaun) を指してよき名であつたが、その後はアナドゥイリ川を指してよき名になつた。(Belov, M. I.: Semyon Deghnyov. Moskva, 1955. str. 52-61)
- それゆゑ、資料Ⅲのコヴィチャ川をチャウン川であると解釈すれば、「辛うじて迂回できる脚」はアナドゥイリ川とチャウン川との間にあることになつて、この「脚」をチホロト半島であるとするとホレヴォイの解釈とも矛盾することはない。
- (53) Polevoy, *op. cit.* str. 229-231.
- (54) *ibid.* str. 242.
- (55) レソンのカムチャツカ進軍にまつては、左記のホレヴォイの論文を参照。Polevoy, B. P.: Zabyty pokhod I. M. Rubsa na Kamchaku v 60-kh gg. XVII veka. (Izv. AN SSSR. Ser. Geogr. 1964, No. 4), str. 133.
- (56) Polevoy, B. P.: K istorii formirovaniya... 1964. str. 232-235.
- (57) Polevoy, B. P.: *ibid.* str. 245.
- (58) Titov, A. A.: *op. cit.* str. 109-110. Berg, L. S.: *op. cit.* str. 46. Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 239.
- (59) Polevoy, B. P.: *op. cit.* str. 248, 245.
- (60) *ibid.* str. 248. Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 267.
- (61) Baddeley, J. F.: *op. cit.* p. 271.
- (62) Polevoy, B. P.: *op. cit.* str. 245-246. Baddeley, J. F.:

- op. cit. p. 240. Titov, A. A. : op. cit. str. 111.
- (62) Cahen, G. : Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand (1689-1730). Paris, 1912. p. 49.
- (63) Bagrow, L. : A few remarks on maps of the Amur, the Tartar Strait and Sakhalin. (Imago Mundi. XII. 1955). p. 128. Imago Mundi. IX. 1952. p. 90.
- (64) 宮崎正義、近代露支關係の研究、沿黒竜江地方之部。大正
- (65) 一一年。一九四頁。西清著、石川年訳、黒竜江外記。昭和  
一八年。一〇頁、一八頁、二九頁。
- (66) 船越昭生、ウイットセンの北東アジア地図をめぐる二三の  
問題。(史林、四七卷一号、一九六四年)。
- (67) 同、康熙時代のシムリア地図—羅振玉旧藏地図について。  
(東方学報、第三三冊、昭和三八年)。二〇〇—二〇七頁。

(昭和四二年四月一八日稿)

## **Spafary's Map of Siberia**

**Masatoshi MIKAMI**

N. G. Spafary (Spathary) went back forth between Moskva and Peking, crossing Siberia, as the Russian ambassador (1675-1678). Since he had been ordered to produce a map of Siberia by the Russian Ministry of Foreign Affairs, it can be supposed that he



submitted one to the Ministry in 1678.

A map of Eurasia surmised to be this one or its copy went into L. Bagrow's possession. On this map, the main routes of transportation crossing Siberia and their neighboring areas and the northeastern part of Asia are represented a great deal more in detail and far more accurately than on any other maps of Siberia produced before in the seventeenth century. China, on this map, is apparently drawn on the model of "Imperii Sinarum nova descriptio" in Martinus Martini's "Novus Atlas Sinensis" (Amsterdam, 1655).

One of the remarkable characteristics of "Spafary's Map" is that a great mountain-range, extending from the east of Lake Baikal to its northeast, protrudes itself far out into the sea, strangely enough nobody knows how far. V. P. Polevoy, the Russian geographer, concluded that this should correspond to Kamchatka Peninsula. This is a plausible conclusion.

This mountain-range is the same with "the rocky mountain which cannot be rounded" or "a rocky wall" which appears in the texts of the Siberian maps of 1667 and 1673, Spafary's "Description of the great River Amoor," etc. It is surmised that Spafary represented this mountain-range in this way because he believed that "the end of the mountains is known to none," and also because he had heard "that range of mountains goes to the New World."